

3. 国語科

3.1 国語科における現状と課題

国語科では、小中それぞれの実態と系統性の観点から以下の課題を整理した。

推進委員会において小学校では、学習に意欲的な児童が多い一方で、読み書きの基礎力における二極化が顕著であること、中学校では、話し合いの形は整うものの、発言を相互に繋げて思考を深めるまでには至らず、語彙力不足が読解や表現の妨げとなっている生徒も見受けられることが挙げられた。

推進委員が小中共通の課題として捉えているのは、自分の考えを自由に表現することへの困難さがあることであり、その背景には、自分の考えを支える「文章から根拠を見つける力」が十分に定着していないという実態がある。根拠となる叙述を見つけ出し、それに基づき思考を構築する力が不足しているため、表現が主観的な感想に留まったり、記述が止まってしまったりする傾向がある。

また、小学校での音読活動が、中学校での本格的な朗読や深い鑑賞へと十分に接続されていないことが課題として挙げられたため、本研究では小中の系統性をより明確にしようと、共通の学習分野である古典に焦点を当てて話し合いを進めた。古典特有のリズムを重視した「音読」から、文章の思想や感情を深く理解し、表現力を高めて読む「朗読」へと段階的に高める活動は、言葉の響きを味わうだけでなく、内容理解を深める上でも有効であると考え、本実践の柱にすることとした（図 25）。



図 25 国語科グループの協議の様子

3.2 研究の視点と授業改善の工夫

現状と課題を踏まえ、「文章から根拠を見つける力」と「古典学習の系統的な接続」を柱に捉え、以下の視点で改善に取り組んだ。

一つ目は、文章の内容理解を基盤とし、「文章のここにこう書いてあるから、こう考えた」というように、根拠を明確にして自分の考えをまとめ、表現する力を養うことを目指した。二つ目は、古典学習における小中のギャップの解消のために、小学校で培われた音読の力を中学校の朗読への土台とすることを共有した。古典の独特のリズムや言い回しを小学校ですらすら読める力として習得し、中学校での「なんとなく雰囲気」で話が分かる状態をつくり出すことで、古典への抵抗感を払拭し、当時のものの見方や考え方に触れる読解へと円滑に移行させる工夫を考えた。

3.3 授業実践と研究協議

(1) 授業実践の概要

本実践は、中学校2年「平家物語」の単元において、小学校で培われてきた音読の力を中学校の古典学習に接続させ、抵抗感を軽減しながら根拠に基づいて読み解く力を育成することを目指した。

①導入（音読を軸とした既習の活用）

小学校で親しんできた音読の力を土台とし、朗読の時間を普段より多く取り入れた。併せて、教師が生徒に平家物語の内容について問いかけながら丁寧に振り返る導入を

行った(図 26)。この際、教師の「何時代のこと?」「扇的を射るきっかけは何だったの?」といった問いに対して教室のあちこちから自然と声上がる活気あふれる雰囲気生まれ、全体での発言が苦手な生徒も他の生徒の発言に深く頷きながら聞き入るなど、学級全体で内容を確認し合う姿が見られた。この様なやり取りを通じて古典特有の難しさのハードルを下げた上で、朗読発表に移った。第4時という後半段階での朗読であったため、その場にいる全員に「(発表した生徒は)この一文が好きなんだな」と伝わるほど感情豊かに朗読した。聞いている生徒も朗読の響きに慣れ、他者の表現に自然と笑顔がこぼれるなど、学級全体が温かい雰囲気作品の世界に向き合うことができた。



図 26 平家物語を生徒と振り返る様子

②展開(根拠に基づいた読解と対話)

「あ、射たり」や「情けなし」といった場面の解釈を中心に、登場人物の心情に共感し、自らの立場を明確にする活動を展開した。生徒は「当時の自分だったら」という視点から、どちらの立場に共感するかを選択し、その理由を言語化していった(図 27、28)。立場の選択に当たっては、生徒から「今の時代の感覚で考えるのか、それとも当時の価値観で考えるべきなのか」という質問が挙がった。この問いは、古典の世界を単なるお話としてではなく、時代背景による認識の違いとして捉えようとする思考の深まりを示すものであった。

④扇的——「平家物語」から 「目標」読み取ったことを基に、自分の考えを述べよう。		①最後の場面で、「あ、射たり。」と言った人と、「情けなし。」と言った人の気持ちについて	②どちらの立場に共感したか。
「情けなし」と言った人	「あ、射たり」と言った人	○をつける	理由
			寂つたためと未だ人だから、情けいとお敵を射るの仕方がない

図 27 ワークシート

④扇的——「平家物語」から 「目標」読み取ったことを基に、自分の考えを述べよう。		①最後の場面で、「あ、射たり。」と言った人と、「情けなし。」と言った人の気持ちについて	②どちらの立場に共感したか。
「情けなし」と言った人	「あ、射たり」と言った人	○をつける	理由
			どんな人からの命令だとしても、したがって自分を守って他人の命をどう扱うかは最低だと思ったから

図 28 ワークシート

グループ交流(次頁図 29)ののち、各グループで話し合った内容を全体で共有した。教師がそれぞれの考えを立場ごとに整理して板書し、一つずつ全体で確認していくと、生徒は自分と同じ考えには深く納得し、自分とは異なる視点の意見に対しても「なるほど」と頷きながら聞き入っていた(次頁図 30)。生活班では、意見が偏る傾向も見られ

たが、この全体共有の場を経たことで、多角的な視点から新たな気づきを得ることができた。



図 29 グループ交流の様子



図 30 全体共有の様子

③終末（視点を絞った振り返り）

本時の学びを客観的に捉える振り返りの時間を設けた。以下に示すのは、生徒が記述したシートである（図 31、32）。

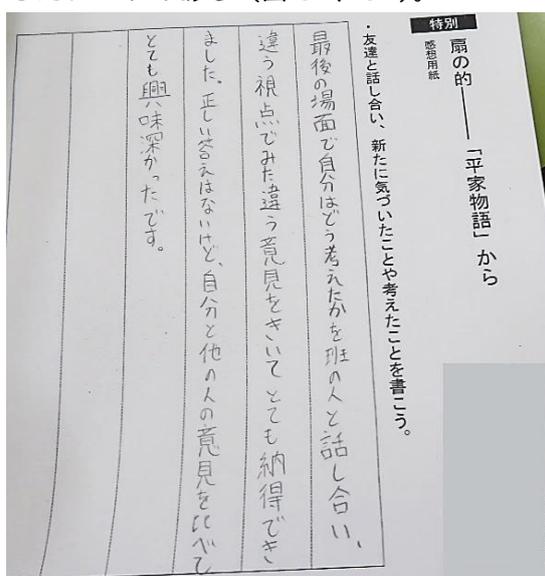


図 31 振り返りシート

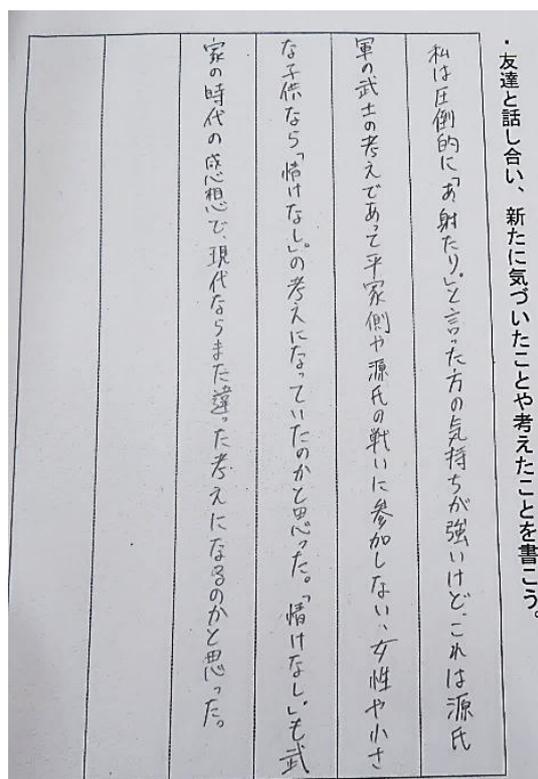


図 32 振り返りシート

活動の感想といった内容ではなく、「話し合いを通して新たに気づいたこと」と記述の視点を絞った工夫を取り入れた。これにより、他者の意見によって自分の見方がどう更新されたかという「学びの変容」が言語化され、生徒自身が古典のおもしろさや新たな視点の気づきを実感することができた。

（2）研究協議における論点と系統性の視点

研究協議では、古典学習における音読の意義と、対話的な学びの質を向上させるための手立てについて、以下の点が確認された。

①小学校で「読み親しむこと」を重視し、歴史的仮名遣いを含め、リズムよく読む力を身に付けることが、中学校での深い読解への重要な土台となる。中学校においても、感情を込めて朗読する活動は、作品を深く読み解くための方法の一つであり、国語科全体でこの活動を系統的に位置付ける重要性

が共有された（図 33）。

4、心情や情景を思い浮かべて読めた。	3、相手に伝わる声で読めた。	2、歴史仮名遣いを現代仮名遣いに直して読めた。	1、つまらずに読めた。	自己評価
<input type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/>	◎ ○ △
4、心情や情景を思い浮かべて読めた。	3、相手に伝わる声で読めた。	2、歴史仮名遣いを現代仮名遣いに直して読めた。	1、つまらずに読めた。	評価シート
<input type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/>	3 ◎ ○ △

図 33 朗読活動の評価シート

②実践では登場人物への共感になっていたため、中学校段階での論理的思考を高めるためには、「文章のこの記述があるから、こう考えた」という根拠を明確にする手立てが必要である。主観的な気持ちの交流に留まらず、テキストに即して論理的に解釈する方法を提示することも今後の改善ポイントとして共有された。

③生活班による交流では意見の偏りが見られたため、考えを深めるにはジグソーセッションのような異なる考えをもつ者同士を意図的に交差させる編成が必要である。また、相手の意見に対して、その根拠を問い直すといった具体的な課題設定を行うことで、感想の共有に留まらない、思考を深める対話へと質を高めることが今後の課題として挙げられた。

④漠然とした振り返りではなく、「話し合いを通して新たに気付いたこと」と内容を絞って記述することで、生徒の学びの変容や新たな視点の気付きがより明確に可視化できることが確認された。

3.4 本実践を踏まえた授業モデルとその他のポイント

本研究の成果に基づき、国語科の授業改善に向けた系統的なモデルと改善ポイントを以下のように提案する。

(1) 授業モデル

①音読で古典に親しむ

小学校で習得した「音読の力」を中学校の学習の土台として活用する。古典特有のリズムや響きに親しむ時間を十分に確保することで、作品の雰囲気や時代背景を感覚的に捉えさせ、古典の文章に対する抵抗感を緩和する。

②多角的な視点を生み出す対話

単なる感想の交流に留めず、文章の中に根拠を求める活動を取り入れる。自分と異なる解釈をもつ生徒同士で意図的に交流できるグループ編成や、「相手の意見の根拠を指摘し合う」といった具体的な課題を設定することで、自分にはなかった視点を取り入れ、思考を深める対話を生み出していく。このような方法により、多面的な視点から作品を深く読み解く力を養う。

③視点を絞った振り返り

「話し合いを通して新たに気付いたこと」や「自分の考えがどう変わったか」に焦点を当てた振り返りを行う。知識の定着を確認するだけでなく、他者の視点を取り入れることで自分の思考の変化の過程を言語化し、学びを実感できる。

(2) その他のポイント

・「文章から根拠を見つける力」の展開

今回の古典学習の実践を通して、内容を深く理解するためには「根拠を明確にする

力」が必要であることも再認識された。今後はこの学びを現代文の論理的な文章や記述・表現の指導においても重点化する。「文章中の言葉を手掛かりにして、自分の考えを形にしていくプロセス」を9年間を通じ一貫して指導することで、課題となっている記述力の向上を図る。

・言語活動を支える語彙力の系統的な育成

小中を通じた大きな課題である語彙力不足を解消するため、単なる意味の暗記ではなく、文脈から背景と関連付けた言葉の習得を重視する。特に中学校への円滑な接続を見据え、小学校段階から学習活動で言葉を使いこなす経験を重ねる。今回の実践の中では、音読や朗読が文章の意味理解の大きな助けとなった。このことは、小中を繋ぐ語彙力育成の一つの手掛かりになり得る。

授業実践（中学校）第2学年国語科

1 単元（題材）名

『平家物語』に見る人間の心と時代の価値観を読み解く（光村図書「国語2」）

2 単元の目標

・作品の特徴を生かして朗読し、古典の世界に親しむことができる。

【知識及び技能】（3）ア

・現代語訳や語注などを手がかりに作品を読むことを通して、古典に表れたものの見方や考え方をすることができる。

【知識及び技能】（3）イ

・登場人物の言動の意味などについて考えて、内容を解釈することができる。

【思考力、判断力、表現力等】C読むこと（1）イ

・言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を生活に役立て、我が国の言語文化を大切にしてい、思いや考えを伝え合おうとしている。

【学びに向かう力、人間性等】

3 指導によせて

（1）目指す子どもの姿（内容の系統性）

ベースとなる力（以前の単元で付けた力、小学校で付けた力）

- ・スムーズに音読できる力
- ・自分の考えをもつにあたり、根拠となる箇所を本文から示せる力（読み解く力）



本単元で付けたい力

- ・古文特有の調子とリズムでスムーズに朗読できる力
- ・登場人物の言動の意味を考え、そこに表れたものの見方や考え方を捉える力。



本単元で付けた力が生かせるであろう新しい単元

- ・『徒然草』－『平家物語』で培った無常観や音読力を基盤に、古典的なものの見方や日常の美意識を深める学習へとつなげる。
- ・『奥の細道』－音読によるリズムや語感の学びを活かし、俳句や紀行文の世界に親しむ。
- ・『言葉の力』－古典の言葉の響きや意味を考えた経験を、言語の本質理解へとつなげる。
- ・『走れメロス』－人物の心情理解、価値観の対比、共感の力を活かす。

(2) 小中連携を意識した学びの実現のために

小学校では古典に触れる機会が限られているため、中学校における古典学習の導入では、小学校で培った音読力や語彙力、登場人物の気持ちを想像する力などを生かしながら、古典特有の表現や背景に親しむ工夫が求められる。『平家物語』の学習では、現代語訳や語注を手がかりに、登場人物の心情や時代背景を読み取り、グループでの対話を通して多様な見方を共有する活動を取り入れる。最終的には、自らの考えを文章で表現することで、古典に表れたものの見方や考え方を深く理解し、9年間の学びのつながりと発展を意識した学習を実現する。

4 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> 作品の特徴を生かして朗読し、古典の世界に親しんでいる。((3)ア) 現代語訳や語注などを手がかりに作品を読むことを通して、古典に表れたものの見方や考え方を理解している。((3)イ) 	<ul style="list-style-type: none"> 「読むこと」において、登場人物の言動の意味などについて考えて、内容を解釈している。(C(1)イ) 	<ul style="list-style-type: none"> 登場人物の言動の意味について進んで考え、学習課題に沿って考えたことを伝え合おうとしている。

5 単元の指導と評価の計画(全6時間)

時	主な学習活動	評価規準		
		知	思	態
1	<ul style="list-style-type: none"> 『平家物語』の概要や特徴を捉える。 冒頭部分や「扇の的」の原文の範読または朗読を聞く。 教科書の資料を参照し、「扇の的」の概要を確認する。 【ワークシート①】 	○		
2	<ul style="list-style-type: none"> 「扇の的」を朗読し、リズムや七五調に慣れ親しむ。 現代語訳を参照しながらあらすじ、時代背景を捉える。 『平家物語』冒頭「祇園精舎の鐘の声」と「扇の的」を朗読し、リズムや七五調に慣れ親しむ。 漢語を巧みに交えた独特の調子やリズムを意識して、原文を朗読する。 ペアやグループで互いに朗読を聞き合い、アドバイスをする。 【ワークシート②】 	○		

3	<p>○登場人物の言動から、心情を考える。…①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水ぎわへ向かって馬を歩ませる与一や、それを見送る源氏の武士たち、義経の思いを考える。 ・「あ、射たり。」と言った人、「情けなし。」と言った人の気持ちについて考える。 <p style="text-align: right;">【ワークシート③】</p>	○	○	
4 (本時)	<p>○登場人物の言動から、心情を考える。…②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「あ、射たり。」と言った人、「情けなし。」と言った人の気持ちについて考えたことをグループで話し合い、どちらの立場に共感できるか根拠を明確にして考える。 <p style="text-align: right;">【ワークシート③】</p>		○	○
5	<p>○読み取ったことや話し合った基に自分の考えを述べる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・登場人物の言動から読み取れるものの見方や考え方について、自分の考えを与一に対する手紙形式としてまとめる。 <p style="text-align: right;">【ワークシート④】</p>		○	
6	<p>○「弓流し」の場面の内容を捉え、自分の考えをまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今までの学習で捉えた登場人物の言動や「弓流し」の義経の言動をもとに、武士の生き方とそれに対する自分の考えをまとめる。 <p>○単元の学習を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートを見返し、学習を通して気づいたことや考えたことを振り返りシートに記入する。 <p style="text-align: right;">【ワークシート⑤】</p>		○	○

6 本時の目標（本時：4／6時間目）

登場人物の発言に込められた心情や価値観の違いを読み取り、どちらの立場に共感するかを根拠をもって考えることができる。

7 本時の展開

時	主な学習活動等	・指導上の留意点 ◆評価（方法と観点）
導入	1. 前時までの学習を振り返り、本時のめあてを確認する。	・パワーポイントや単元計画を活用し、視覚的に振り返りやすいようにする。
展開	<p style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;">「あ、射たり。」「情けなし。」の言葉にこめられた気持ちや考え方を読み取り、どちらに共感するかを自分の言葉で考えよう。</p> <p>2. 与一が平家の男に矢を放った場面を確認する。 ・前時の振り返りとして、与一が平家の男に矢を放った場面の原文を朗読する。</p> <p>3. 前時に作成したワークシートをもとに、「あ、射たり。」と言った人と「情けなし。」と言った人の気持ちを捉え、自分がどちらの人の気持ちに近いのか、根拠を明確にして伝え合う。</p> <p>4. 交流を通して、自分のものの見方・考え方がどのように深まったか、ワークシートにまとめる。</p>	<p>・話し合いを深める視点として、「誰の言葉であるか」という問いを生徒に投げかける。</p> <p>◆「あ、射たり。」と「情けなし。」と言った理由を互いの立場や考えを尊重しながら話し合っている。（発表・ワークシート） 【主体的に学習に取り組む態度】</p> <p>◆交流を通して、自分の意見がどのように深まったか、まとめている。（ワークシート記述）【思考・判断・表現】</p>
終末	5. 本時の振り返りをする。	<p>・前回に考えた自分の意見から、交流を通してどのような変化や深まりがあったのか具体的にまとめるよう指導する。</p> <p>・次時は、登場人物のものの見方や考え方について、自分の考えを与一に対する手紙形式にしてまとめることを告げる。</p>